

田原 総一郎 V.S. 李 櫻

映画『靖国 YASUKUNI』は、中国人監督・李櫻さんが、終戦記念日の靖国神社を10年にわたって取材したドキュメンタリー映画。日本の歴史を見つめ、アジアの未来を考えさせてくれる作品だ。この映画について、評論家の田原総一郎さんと監督の李櫻さんが語り合った。

広告

日本とアジアの未来を考えるドキュメンタリー

映画『靖国 YASUKUNI』を語り合う



たはら そういちろう / 1934年生まれ、早稲田大学文学部卒業後、岩波映画製作所テレビ東京を経てフリー。「朝まで生テレビ」「サンデープロジェクト」などの司会でおなじみ。
●ジャーナリスト
田原 総一郎さん
SOICHIRO TAHARA



●映画監督
李 櫻さん
LI YING

田原 映画『靖国』は、僕にとついても新鮮な映画でした。靖国神社には何度も行っていましたが、8月15日に行ったことがありません。この映画で初めて8月15日の靖国を知ることができ、その様子に驚きました。右翼や軍服姿の人、小泉首相の靖国参拝を批判する人、戦死した家族を素朴に哀悼している人など、さまざまな立場の人が繰り広げるドラマが実に興味深い。次々と流れる映像に引き込まれてしまいました。

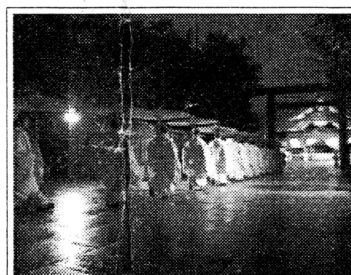
李

この映画は、私から日本へのラブレターのようなもの

李 この映画はナレーションもなく、事実すべてを語らせています。登場人物は演出なし、演技なしの实在の人たちです。日本のマスコミでも靖国のことは報道されていますが、テレビの映像と私の映画で何か違いがありますか。

田原 靖国を、これほど執拗に描いた映像は見たことがありません。よくぞここまで撮ってくれた、と思います。日本のテレビは先入観があり、8月15日の靖国といえば右翼のデモなどの映像が流しがちです。この映画のように、その場にあるものを何でもかんでも客観的に映すようなことはしない。この作品は靖国への潜在的な感情、意識、エネルギーを排除している分、鮮烈です。こ

李 8月15日の靖国神社は、一種の劇場的な空間で、みんな自分の役柄を演じているようなところがある。みなさんカメラ慣れしていて、それほど抵抗はなかったですね。もちろん、ときには撮影相手ともめて、カメラやテープを奪われたこともあります。



田原 僕だけなら、奪われるところを別のカメラで撮って使いますけどね(笑)。でも李さんが、10年間も執拗に靖国を追い続けたのはなぜですか。

李 私は日本で19年間暮らしていますが、日本社会の戦争問題や歴史に対する認識に、どこかギャップを感じていました。またあるシンポジウムで、

田原

靖国神社をこれほど執拗に描いた映像は見たことがない

田原 日本軍の南京入城の映像に拍手喝采をしていた日本人を見て、衝撃を受けました。

李 私も刀を、単なる武器と考えると同時に、日本人の美学や武士道の象徴です。その両面を見る必要があります。刀は武士の魂であり、護国の軍人の魂です。だから靖国神社は刀をご神体にし、そこに戦没者の魂をこめ、英霊としてほめたたえている。そこにはどんな意味があるのか。日本人の集団的な記憶のなかで、靖国はどういう役割を果たしてきたのか。靖国の魂とは何なのか。そんなことを、私はこの映画で問いかけているのです。

李 面でも、李さんは堂々と撮影している。撮られる側からの抵抗はなかったのですか。

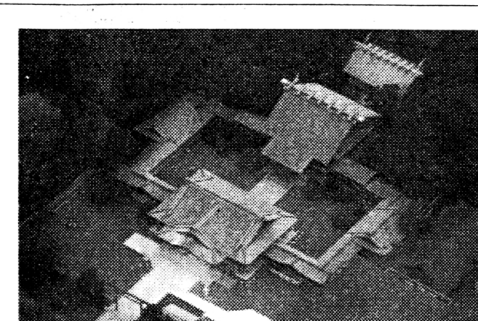
田原 多くの日本人は昭和の戦争、とくに日中戦争は極めてはかげた戦争だったと思っ

戦後何十年も経て、いまだに戦争時代を美化する感情が、一部とはいえ日本に存在している。このことは、自分なりにきちんと考えなくてはならないと思っただけです。



靖国という空間をありのままに描いています。そしてそこにある記憶を発掘し、より深く考えることで、未来は見えてくるのではないかと思っています。

田原 僕にとつての靖国は、一度と繰り返してはならない過去です。僕は靖国に祀られている人の多くは、戦争の犠牲者だと思っています。あの犠牲があつて、今の平和がある。こ



偏狭なイデオロギーにとらわれることなく、新しい視点で靖国を記録したこの作品は、サンダンス映画祭やベルリン国際映画祭に招待され、海外でも大きな反響を呼んだ。本作は日本、中国、韓国の3カ国の協力により、真のアジアの友好を目指す合作映画として製作されたもの。日本の歴史に真摯に向き合うことで、アジアの未来を考

解説

普段は平穩なものだが、毎年8月15日になると、独特な祝祭的空間に変貌する靖国神社。軍服を着て「天皇陛下万歳」と叫ぶ人、場違いな主張を述べて星条旗を掲げるアメリカ人、追悼集会に抗議して参列者につまみ出される若者、日本政府に「勝手に合祀された魂を返せ」と迫る台湾や韓国の遺族たち……。映画『靖国』

は、そんな終戦記念日の靖国神社を10年にわたる記録映像で描いたドキュメンタリーだ。この映画では、日本人にもあまり知られていない事実が明らかにされる。それは、靖国神社のご神体が刀と鏡であり、昭和8年から敗戦までの12年間、境内で8100振りの日本刀が作られていたという事実。映画では、靖国刀の鑄造を黙々と再現する現役最後の刀匠の映像を象徴的に使いながら、靖国刀の意味を明らかにしていく。

